

脱落者の世界創造

焔の薙刀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

つまらない世界にうんざりしていた主人公漣は、自殺を決意する。しかし次に目が覚めたのは見たことも無い景色で目の前には化け物が！一体漣はどうなるのか？

目次

つまらない世界	第一話
刺激的な世界	第二話
	3
	1

つまらない世界

第一話

オリ作です！暖かい目で見てやって下さい！

「ああ、つまんねえなー…」毎日のように呟いていた。

俺に与えられた名前(漣 さぎなみ)この名前以外俺が気に入っているものはない。

漣「ただいまー」

こうはいつたものの俺には親族 家族がない。

漣「晩飯でも作るかな。」

そう言う俺は、包丁を取り出し食材を切ろうとした

そのとき俺の頭にひとつの考えがよぎった。

漣 「死ねば、あの世が有るのかどうか分かるのか？俺に関係する人が居ないから良いだろう。」

そう呟くと、俺は手に持っていた包丁を首に当てる。

漣「まるで世界の脱落者みたいだなw」

こうして俺の第一の人生は幕を閉じた。

漣「うう、ああ、」

俺は精一杯体を伸ばした。

漣「ここはどこだ？」

見たことも無い景色 広い草原 向こうには森

漣「これがあの世って奴か？」

漣「でも死んだら神様とかが居るんじゃないか？」

そう思い上を見上げると、一匹の鳥が俺の頭上でとまり、目の前に素早く降りてきた。

??? 「ゴギユアアアア！」

次の瞬間、その鳥の頭上に文字が浮かび上がった

漣「コカトリス？Lv20？どうゆうことだ？しかもデケえ！」

そんな疑問を感じる暇も無く、その化け物は足の爪をふり上げ、俺の顔めがけ振り下ろした。

漣「あぶねえ！」

俺は後ろに飛び退いた。そして化け物の爪に当たった前髪が石となり、崩れ落ちた。

漣「つーかなんだこれ？」

余りの驚きで気付かなかったが俺の手には死んだときに使った、包丁が握られていた。

漣「これしかないが闘うしかないか！」

そう決意し、奴の足をめがけて包丁を振りかざした。

コカトリス「グギャアアアア!!!」

見事に当たり化け物の足から紫色の血が流れる。

だが次の瞬間、化け物が突進してきた。腰が抜けた。

漣「うわあああ！」

俺はとつさに両手を前に突き出した。

コカトリス「ゴエエエエエ!!!」

化け物は悲鳴を上げ、去って行った。

そして俺の目の前には銀髪の髪が立っていた。

??? 「大丈夫？」

漣「は、はい。」

彼女はそう言う俺に手を差し伸べた。

ローゼ「私の名前はローゼ。君見たことのない服だね。」

確かに俺は黒のパーカーにジーパンという服装だが、そこまで言われると自分のファッションのセンス疑う。

漣「そんなに珍しいか？」

ローゼ「うん。だってコカトリス相手に鎧と魔力装甲もなしで立ち向かうとか初めて見たもん。」

漣「鎧はまだ分かるけど、魔力装甲って？」

ローゼ「え、魔力装甲も知らないの？本当にこの世界の人？」

俺は正直に答えた。

漣「恐らく違うと思う。それよりここはなんていう場所なんだ？」

ローゼ「シルベルト草原だよ。私のお気に入り場所なんだ。」

漣「き、聞いたことねえー」

次回、この世界について明らかにする。

刺激的な世界 第二話

漣「シルベルト草原ってどこの地域だ？」

ローゼ「地域？ギルド管理区域のこと？それだったらヴァルキリーロイゼンバラの騎士団が管理してるけど？」

漣「ギルド？ヴァルキリーロイゼン？それは一体何なんだ？」俺はローゼに問いかけた。

ローゼ「この国はギルドがあつて各地でギルドが管理してる土地だよ。ギルドって言うのは魔力がある人達が入るところさ。」

漣「てことはローゼも魔力があるのか？魔力って言うのは魔法を使うときの力って事か？」俺はRPGをやっていたので、そこら辺のこととは少し分かる。

ローゼ「そうだよ。……君も使えるはずさ。試しにその木に手を定めて体内にある魔力を放出してみて。」俺は言われるがままに体内の魔力をイメージしてやってみた。すると勢いよく一本の縄が出てきた。

漣「これが俺の魔法か、何か地味だな……」

ローゼ「君はウエポン系だね、道具を出せる魔力みたいだ。ウエポンは魔力次第で質 重さ 長さ 強度が変えられるんだよ。」そんな話をして歩いている内に街が見えてきた。

ローゼ「あそこがウエルガラムだよ。あの街にヴァルキリーロイゼンがあるんだ。そうだ！君はギルドに入っていないんだろ？だったらヴァルキリーロイゼンに入らない？」

漣「そうだな。確かに行く場所もないし。」

そんな話をしていると、草むらから5匹の子鬼が出てきた。

漣「こいつらは?!」

ローゼ「ゴブリンだよ。雑魚だからすぐにたおせるよ。何なら漣が倒してごらん？」

漣「分かった。てか何故俺の名前を？」

ローゼ「頭の上」

漣「なるほど！ きた！」

俺は縄を出しゴブリン達の首をまとめて思い切り引つ張った

ローゼ「なかなかエグい殺し方するね。」

漣「すまない。だけどこれぐらいしか殺す方法が思いつかなかつたんだ。」

しばらくすると、ゴブリン達からにじ色の光が出て、俺の体内に入っていった。

漣「これは？」

ローゼ「経験値さ。自分に与えるか、武器と自分に与えるか、武器に与えるか、選びな。今体内に残った経験値は放っておけば基礎能力が上がるし、武器に与えれば武器の基礎能力が上がるよ。」

漣「へー。」

俺は言われた通りにやって見ると力がみなぎってきた。

漣「なるほど。こうやって強くなっていくわけか。」

この世界での鍛え方は何となく理解したが、生き方をまだ把握していない。

まあ、幸運なことによりこの世界では日本語が通じるからなんとかいけるだろう。

そんなことを考えていると、広い街にでた。

漣「ここがウエルガルムか？」

ローゼ「そうだよ、そしてあの大きい建物がヴァルキリーロイゼンだよ。」

漣「なかなか大きいな。」

ローゼ「まあこの辺では有名なギルドだからね。」

???「ローゼ 今までどこ行ってたの？草原の調査にしては、時間がかかりすぎ。」

身長140cmぐらいの子供がローゼに問いかけた。

ローゼ「ごめん ファロン、実は草原でコカトリスに襲われている彼を助けて、道中話ながらきたんだ。」

ファロン「この男を助けてたの？ 何かおかしいな服装ね。」

漣（やっぱこの世界だと変なのかなこの格好？）

（後でこの国の服を買つとこう）

漣「ローゼ この子もヴァルキリーロイゼン？」

ローゼ「漣！ ファロンを子供扱いしたら怒られるよ！」

漣「そうなのか、ごめんな。 えーとファロンさん？」

ファロン「服装もださいうえに礼儀もなっていないなんて、最悪ね。」
うーわ第一印象最悪だ。

ローゼ「と、とりあえずギルドまで行こう。 漣も手続きとかあるし。」

ファロン「まさかこの男をヴァルキリーロイゼンに入れるの?!」

ローゼ「だって行き場がないって言うから、、」

ファロン「あんたのそのお人好し過ぎるところ少し直した方がいいわよ。 まあここはローゼに免じて許してあげるけど、次子供扱いしたら殺す。」

おいおい なかなか物騒だな

漣「とりあえず名乗っておこう 俺は漣 よろしく。」

ファロン「ファロン。 ファロン・アークネスト」

俺はファロンに自己紹介したあと、3人でギルドに向かった。

??? 「ファロン ローゼお帰りー」

ローゼ「ただいまマスター」

ファロン「ただいま」

マスターと呼ばれる人は、耳が少しとんがっていてほしい20代ぐらいの、若い金髪の綺麗な女の人だった

マスター「ところでその人は？」

ローゼ「この人は漣 草原の調査中にコカトリスに襲われてて、」

ローゼは俺と出会った経緯を話した。

マスター「それでヴァルキリーロイゼンに入りたいと、まあいいんじゃない？ただ一つ条件があるわ。 あなた魔法は使える？」

漣「使えますよ。 ものすごい地味ですけど。」

マスター「ちよつと使ってみてくれる？」

漣「はい。」

俺はゴブリンを倒した時と同じように魔力を放出するイメージでやってみた そうさつきと同じく。

漣「縄が、でない。」